

日本軍の中国中南部侵略

——呂集團作戰について 日中戦争論ノートその2——

明 石 岩 雄

はじめに

筆者は本誌第9号「日中戦争論ノート」において日中戦争の戦争目的を論じ、日本の侵略目的が中国中南部経済開発における日本の主導権掌握にあったとの仮説的見解を呈示し、その仮説を論証するために、呂集團作戰および華中鉄道株式会社¹の究明を今後の作業課題とした。本稿はこれらのうちの呂集團作戰について、筆者が収集した日本側および中国側の資料に基づいて具体的に論ずるものである。

一般に戦争に関する歴史的研究にはいくつかの困難がともなう。最大の困難は言うまでもなく資料上の制約である。とくに日中戦争の場合、一九五二年の講和条約の発効、一九六五年の日韓条約、および一九七二年の日中共同声明・一九七八年の日中平和友好条約の締結をもってその外交上

の戦後処理は基本的枠組みが整ったが、現在もなお日中両国間・日朝間・その他日本とアジア諸国との間に外交問題化しうる諸事件が存在する。また外交上の処理のほか、日本国民の侵略戦争に関する社会的道義的責任の問題は依然として残された課題である。それゆえ日中戦争に関する基本的な資料は、なお過去の歴史的事件として国民に対して全面的に公開されたものになっていくわけではない。

資料上の制約はこうした事件の現在性によるもの以外に、戦争という歴史的事実それ自身が持つ特殊性にも基づいている。例えば外交交渉の場合、その交渉の経過を残存する一次資料によりある程度まで実証することが可能である。だが戦争の場合、例えば個々の戦闘局面に関して、それを考証するための一次資料を求めることは極めて困難である。多くの場合、わずかに残された一次資料と相当量の当事者

の公的及び私的戰場回顧、もしくは他者による間接的回顧に依拠してそれを再構成せざるをえない。この作業は必然的に研究者に対して厳密な資料批判の技術を要求する。

さらに戦争の歴史的研究には歴史学固有の方法的ないし叙述的困難がともなう。歴史学が戦争をその叙述対象とする場合、いわゆる『戦史』・軍事戦略・戦術の「科学的」研究とは自ずからその目的を異にする。後者の場合の目的はあくまでプラグマティカルなものでなければならぬ。だが、歴史学のそれは戦争を歴史的事実として——故小此木真三郎氏の言葉を借りれば「事実から出発し、事実と事実の関連をあきらかにし、これにもとづいて諸現象を發展的、総合的に把握」²⁾するために、なされる。そしてその基本的課題は戦争の諸原因を究明することにある。このことは決して容易な課題ではない。

本稿が対象とするのは日中戦争の第二局面——つまり日本軍が上海・南京を占領してその侵攻線を揚子江に沿って武漢にまで伸ばし、ついで信陽・岳陽・南昌・安慶の四都市を結ぶ面的支配へと移った段階——に展開された呂集団作戦(第十一軍、軍司令官岡村寧次)である。筆者にとつて日中戦争の全過程を歴史的に叙述する作業は、現在なお

今後の課題に属する。本稿の課題はそのための基礎的作業として、呂集団作戦に関する資料批判に限定される。

なお、論述に際しては上記の諸点を考慮し、論考の基礎となる中国側の資料を本文の後に付した。資料は中華人民共和国・台湾政府の二種にわたる。それぞれ書式を異にするので、掲載にあたり以下の処理を施した。

1 中華人民共和国側資料は原文どおり簡体字を用い、横書きとした。ただし、他の資料との整合性を考えて、半角アラビア数字を漢数字に改めた。

2 台湾政府側資料は原文の繁体字を簡体字に改め、横書きとした。

掲載した資料にはA……Dまでの記号を用いて分別し、また本文で言及した箇所には資料ごとに下線を施した。資料中の下線はすべて筆者によるものである。

一 呂集団作戦に関する資料について

日中戦争に関する研究は多くの歴史学者の努力により、また、歴史家以外の諸氏のそれぞれの立場からの追求により、戦後から今日までに大きな進歩を見せ、近来、ようや

く研究者個人による包括的通史が叙述されつつあり、個別的研究もかなりの量が蓄積されてきた。しかし勿論、その全過程が実証され尽くされたわけではなく、また、日中戦争の全体像に関する論争は、最近ようやく研究者の間でその緒についたところだと言つてよい。

本稿で取り上げる呂集団作戦について言えば、臼井勝美氏らの先駆的業績を除けば、最近の通史では石島紀之氏の『中国抗日戦争史』がこれをやや詳しく叙述している。だが、それ以外では、この作戦の前提となる武漢攻略戦までは比較的详细に論じているものはあるが、その後の呂集団作戦まで論じたものはほとんどない。現在の段階でこの作戦に関する比較的まとまった研究としては『現代史資料 9 日中戦争2』の臼井勝美氏執筆による「解題」のほか、岡村寧次に関する伝記的著作である『岡村寧次大将資料(上)―戦場回想編―』・「支那派遣軍総司令官 岡村寧次大将」の二書があるだけである。

『現代史資料 9 日中戦争2』に所収の呂集団作戦関係資料は全部で三二件であるが、これは防衛庁防衛研究所が所蔵する呂集団作戦(第十一軍)関係資料の一部に過ぎない。防衛研究所所蔵の関連資料のうち、特に重要なのは天

野正一氏(一九三九年呂集団司令部作戦参謀、当時陸軍中佐、終戦時陸軍少将)が同所に寄贈した「天野資料」である。「天野資料」は防衛庁図書館の史料経歴票によれば、同氏から一九五六年に防衛庁防衛研究所戦史室に貸与され、その後、一九五八年に改めて同戦史室に寄贈されたものである。

岡村寧次に関する伝記的著作のうち、「岡村寧次大将資料(上)―戦場回想編―」は、防衛庁の要請により岡村寧次自身が戦場体験記録としてまとめたもので、稲葉正夫氏が「解題」を付している。岡村寧次の「追記」によれば、岡村寧次は一九六三年から一九六五年にかけて執筆し、その決定稿を脱稿するにあたり、「小林浅三郎参謀長、今井武夫参謀副長、西浦進、宮崎舜市、小笠原清各参謀に補修意見を求め、その結果さらに検討補訂した」とあり、岡村寧次の回想を宮崎舜市氏が註記する形式をとっている。また『支那派遣軍総司令官 岡村寧次大将』は松木繁氏の執筆による岡村寧次の伝記である。同書の著者略歴によれば、松木繁氏は「終戦時、陸軍少佐、支那派遣軍参謀」として岡村寧次総司令官の下で涉外委員として国民政府との折衝に当たった。同氏が岡村寧次の伝記を著述するに至っ

た経過については、同書の「まえがき」に、前述の小笠原清（当時、中佐参謀）氏の示唆によったこと、そして小笠原清氏が死去した後に執筆を決意したこと、などが述べられている。また「まえがき」には、船木繁氏は執筆にあたって「日記類（岡村寧次自身の手記―筆者）をそのまま公開することも考えられたが、それでは一部の人達の利用価値しかないし、人間関係も判らない」との理由から、日記類を基礎に著者の調査を加えて記述された旨が記されている。¹² これら二種の伝記的著作の内容についての検討は以下の各章において行い、ここではその来歴を記するに止める。

次に中国側の資料について説明する。

『永修県志』¹³は中華人民共和国江西省永修県人民政府が編集したものである。永修県は日本軍が南昌侵攻の際に渡河作戦を展開した地点である。『県志』という性格から注記は施されていない。

『江西文史資料選輯 第十六輯』¹⁴は抗日戦争勝利四十周年を記念して編集されたもので、編集主体は人民政府ではなく、江西省政治協商会議である。薛岳氏は日本軍の南昌侵攻に抗日軍として抵抗した中国軍の軍長である。

『抗日戦争簡史』¹⁵は台湾出版社から出されたもので、著

者の虞奇氏もやはり中国軍参謀として日本軍の南昌侵攻に抵抗した。

中国側の資料としてはこれ以外に、上記『江西文史資料選輯』の各巻が数多く当時の回想録を掲載しているが、これらについては以下の具体的な分析で必要なものに限りに及ぶことにしたい。

二 日本軍の南昌侵攻

日本軍の江西省城都南昌への侵攻を論ずるにあたり、その前提として、日中戦争全面化前後の時期、蒋介石・国民党政権によって進められていた湖北・湖南・江西三省工業化計画について簡単に述べておく必要がある。

一九三〇年から一九三四年にかけて五次にわたる「掃共」作戦で、紅軍の江西根拠地からの撤退・大長征を余儀なくさせることに成功した蒋介石・国民党政権は、一九三五年四月、国民党の軍事機構の改変に着手した。その一環として、それまで資源の調査・開発計画の立案を主たる任務とされていた国防設計委員会の活動を終了させ、新たに国営企業の建設運営機構として軍事委員会資源委員会を発足させ

た。この資源委員会が国際資本（ドイツを含む）との技術・資本提携の下に具体化したのが、湘（湖南）・鄂（湖北）・贛（江西）三省を中心とした「国家工業化」促進のための重工業建設五ヶ年計画である。¹⁶⁾

この湖北・湖南・江西三省重工業建設計画のための基礎的条件は、第一に一九三六年に完成された粵漢鉄道（広州―武漢）・浙贛鉄道（上海―南昌）の両大陸縦横幹線鉄道の開通による流通面での社会的基盤の整備であり、第二に江西産出のタングステンを担保とした大規模な外債による資本・技術面での国際資本との協力であった。¹⁷⁾ 第三の条件は労働力、すなわち人的資源の開発啓蒙事業であって、蒋介石の信頼の下に一九三一年から一九四〇年までの一〇年間、江西省省長の地位にあった熊式輝が中心となって展開されたいわゆる「新生活運動」がこれにあたる。¹⁸⁾

この計画の内容には、冶金・燃料（石炭・石油を含む）・機械・電気・化学工業などの各部門であわせて一七にのぼる重工業工場および鉞廠の建設が予定されていた。これに必要な総建設資金は二億七千万円である。計画の実施は一九三六年度からで、国民党は同年に一千万円、翌一九三七年には二千万円の内債を発行し、すでに鉄鋼・タングステ

ン鋼・銅鉞（銅鉞は四川省）の各廠が建設されていた。²⁰⁾

つまり、蒋介石・国民党政権のいわゆる「掃共作戦」（「安内攘外」政策）の目的は、中国共産党に軍事的打撃を与えるという政治・軍事的目的と同時に、江西に建設された共産党の革命根拠地（ソビエト区）およびそれとつながる三省における親共産勢力を根絶して、この地域を国民党の支配圏として「安定」させ、ここに中国の経済的中枢地区を建設することにあつたと言えよう。

そして、この蒋介石・国民党政権による経済建設を決定的に阻害したのが日本軍による武漢侵攻であり、南昌侵攻だったのである。

日本軍（第十一軍、軍司令官岡村寧次）の武漢侵攻・南昌侵攻の関係について、岡村寧次はその戦場体験記録のなかで次のように述べている。²¹⁾

武漢攻略のため、中支那派遣軍（畑俊六大将）の下に、第二軍（東久邇宮稔彦王）の外に第十一軍が編成された経緯などは正式記録に書かれているので、本項においては、私個人を中心として第十一軍の編成と出動を述べようと思う。

私が第二師団長として、北満の掖河に駐留していた

昭和十三年の六月二十一日夜、突如として陸軍大臣から「第十一軍司令官に充用せらる、なるべく速に参謀本部に到着すべし」との急電に接した。……

六月二十三日、親補を発令とともに掖河を出発し、……六月三十日漸く着京、七月一日参謀総長に申告、同日午後軍司令部編成の場所である予科士官学校内において参謀総長の軍装検査を受けた。

七月五日午前参内、天皇陛下に拝謁、次で皇后陛下に拝謁、同時御手縫の襟巻を拝受、侍従長から賜金を拝領した。吉本参謀長、鈴木専属副官を同伴して、賢所参拝、御神酒を戴く。参謀本部に入り総長官殿下から派遣命令ならびに軍戦闘序列を受領した。

このたびの軍の編成出動は、秘密を保持されることになり、出発のときの秩父宮、閑院宮、梨本宮各殿下御差遣武官の御見送しも、東京駅を避け参謀本部玄関前となり、侍従武官御派遣は全く中止となったほどである……。

七月六日東京出発、七月九日字品出帆、同十二日上海に上陸した。

この岡村寧次の回想によれば、第十一軍の編成は一九三

八年六月二十一日に、まず岡村寧次に対して陸軍大臣から異動命令が出され、岡村寧次が東京に帰り、参謀本部において総長官（載仁参謀総長）から派遣命令を受けたのが同年七月五日となっている。

また、岡村寧次は同じ回想の別の項（南昌会戦）では武漢占領後の侵攻作戦について、次のように記している。

本項は、私としては本篇随一の思い出であるが、既に度々記すように作戦関係の所感録を焼却し去ったので、日記を逐い思い出し得た印象の深き事柄を述べることにする。

武漢攻略後の次期作戦は、南昌攻略ということに大本営でも、わが第十一軍でも概定され、昭和十四年一月中旬からポツポツ準備に取りかかり一月三十一日次期作戦要綱を決定した。

この部分の回想には当時第十一師団参謀長であった宮崎舜市が以下の註記を付して補足説明している。

私の手許には、南昌作戦の準備並に実施に関する逐日の作戦日誌が大学ノート二百余頁も残っている。以下、幕僚の立場及び作戦の見地から印象深い若干事項を抽出要約してみよう。

一、南昌攻略の由来と経緯について。南昌は江西省の首都で、鉄道と水路の要衝にあたり、相当な飛行基地（武漢作戦中、揚子江上に屢々来襲）の所在地であった。それ故、武漢作戦当初の軍の任務には「状況によりこれを攻略」すべきことが含まれていた。

しかし第百一、第百六師団の戦況進展が不如意のため、その実施を保留されることになった。

そして武漢攻略後の十三年末、更めて「来年陽春の候に南昌を攻略」すべき任務を派遣軍から命令されたのである。

『現代史資料9 日中戦争2』にはこの日付の命令はないが、同年八月二十二日付の載仁参謀総長発令の「命令」²⁸、「指示」²⁹が掲載されている。その「指示」では、作戦区域を次のように限定している。

漢口ニ向フ中支那派遣軍ノ作戦ハ信陽、岳州、南昌附近ヲ越エテ行ハス又北支那方面軍ノ黄河及黄河汜水地域ヲ越エテ行フ作戦ハ行ハサルモノトス

岡村寧次の回想では、南昌侵攻作戦計画は武漢占領後に「概定」されたとあって、その決定時期が不明確である。

しかし、この一九三八年八月二十二日付の「命令」・「指

示」および、宮崎舜市の補足説明から判断すれば、日本軍が南昌侵攻作戦を第十一軍編成時にすでに見込んでいたことは明らかで、その最終決定がなされた時点が一九三八年末であり、具体的な戦略・戦術の検討が翌一九三九年一月中旬から開始されたと言ふことであろう。

南昌侵攻作戦は同一九三九年三月二十日から実行に移され、日本軍（第十一軍）は中国軍の陣地を突破し、一週間後の三月二十七日、日本は南昌を占領下においた。この戦闘では大規模な毒ガスが日本軍によって使用された。この点については項を改めて検討する。

三 南昌侵攻における日本軍の化学兵器（毒ガス）使用について

日本軍の南昌侵攻作戦の立案について、岡村寧次はその戦場体験記録のなかで次のように述べている。³⁰

この作戦について考慮すべき重要点は大体次のとおりであった。

(一) 南昌占領までには三の河流を渡らねばならない。

その第一の修水は河幅約三百米、水深くその右岸約

8 kmに亘り敵は半年前から極めて堅固な陣地を構築している。しかもその右翼は鄱陽湖、その左翼は險峻な山地であるから軍主力を以て修水を強行渡河してこの堅固な陣地を突破する外ない。

(二) 第二の河流は大なる障害はないが重複敵陣地が多い。しかしこれは前項突破の勢で突破は難くない。

(三) 南昌城直前の贛江は、幅一千米以上の大河であるから敵頑強に抵抗すれば渡河容易ではない。

(四) 情勢を総合すればこの地区を守備する敵軍は第一流の地方軍である。中共軍に比べれば、戦力大に劣っているとは判断し、私の必勝信念には何等の暗影がなかった。

この回想文中の(一)にある「三河」のうち第一は修水を、また第三は贛江を指す。(二)に「第二の河流」とあるのは遼河を指すと思われるが、遼河は千州県・安義を通る北遼河と、奉新・宋埠を通る南遼河が、万埠鎮・長埠の間で合流して遼河となり、永修(徐家埠)において修水と合流して、鄱陽湖にそそぐ。ここで言う「第二の河流」が南北両遼河あるいは遼河の何れを意味するかは、ただちに特定できない。しかし、中国側の資料『江西文史資料選輯 江西抗戦

親歴記』に収録されている「一九三九年二月中旬至三月底南昌会戦経過要図」(本文末図1)には、中国軍の陣地配置が詳しく記入されており、それによれば中国軍の陣地は南遼河南岸に集中して布かれていた。また、日本軍は渡河作戦実施にあたり、遼河・修水の合流地域を集中爆撃している。これらから判断して、この「第二の河流」は遼河もしくは南遼河流域を指すものと考えられる。

なお、この回想文の四の部分の文章は文意が一貫していないように思われる。「中共軍に比べ……何等の暗影がなかった」という後半の箇所は、あるいは岡村寧次が回想録を執筆する際に加筆修正したものではないか、と筆者は考える。つまり、(一)から(四)の「敵軍は第一流の地方軍である」までが、作戦立案当時の岡村寧次を含む第十一軍(呂集团)参謀部の情勢判断ではなかったか。

いずれにしても、南昌を侵攻する上での最大の問題は「軍主力」による修水の渡河作戦の成否いかんにかかっていた。そして、日本軍はこの修水渡河作戦成功のために、航空・装甲車・タンク・二〇〇門余の重砲などあらゆる戦力を集中し、さらに、大量の化学兵器を使用したのである。

渡河作戦の経過については、防衛庁所蔵の第十一軍関係

資料のうちの「軍事極秘 昭和十四年七月 修水河渡河戦ニ於ケル特種煙使用概況 呂集團司令部」が詳しい。以下に引用したのは、渡河正面作戦における化学兵器の使用状況および第六師団の戦闘報告に関する部分である。

(1) 実施直前ノ状況

軍ハ一六三〇砲兵ニ攻撃準備射撃開始ヲ命ス

当日河岸ニ於ケル氣象実況ハ第一線ヨリ刻々電話ヲ以テ報告セラレ一八三〇特種煙ヲ使用スルコトニ決シ各兵団ニ対シ予定ノ如ク特種煙ヲ使用スベキヲ電命スルト共ニ第六師団方面ハ風速若干弱キ關係上放射開始時刻ヲ五乃至十分早ムル如ク指導ス

一七三〇ヨリ虬津市附近一帯ニテ行ヒタル陽動部隊ノ発煙ハ好適ナル風向風速ニ送ラレ凸角一帯ヲ覆ウ

(2) 成果利用ノ状況

特種弾ノ急襲射撃ニ統テ第六師団ハ一九二〇一斉ニ第一師団ハ一九四〇各々煙ヲ放射ス煙ハ約五分ニシテ対岸ニ達シ広範囲ニ巨リ敵陣地ヲ包蔽ス

当時第一線ヨリ刻々到着セル電話報告左ノ如シ

第六師団方面

1. 一九二〇 砲射開始 風向一、五〇―二、〇〇

米絶好ナリ

2. 一九三〇 特種筒使用完了 全時渡河開始ス

3. 一九三九 先頭部隊前岸占領

右翼隊方面ノ敵射撃ナシ

虬津市南方高地ヨリスル側射ナシ

4. 一九四六 河岸陣地ヲ占領ス

5. 一九五四 右翼隊第三回目ノ渡河開始

6. 二〇〇〇 王家附近第一線陣地ヲ完全ニ占領ス

統テ全時梁山、鳳棲山ノ敵陣地ヲ占領ス

7. 二〇〇五 右翼隊第三回目ノ渡河完了 左翼隊

ハ黄庄附近ノ第二線陣地ヲ占領ス

8. 二三〇〇 右翼隊ハ大嶺附近ヲ占領ス

9. 二四〇〇 第一線ハ大子嶺、梁山、東部鳳棲山

黄庄、青竹港朱ノ線ニアルモノ、如シ二三〇〇頃ヨリ戦車隊渡河点附近

掃討漏レノ敵ハ射撃ヲ再興シ作業困難ニ陥リ支援歩兵ヲ以テ掃討シ作業

ヲ続行ス

其ノ他敵ノ逆襲ヲ予期セシモノナシ

この引用資料からは修水渡河作戦に使用された化学兵器について三種類の異なった表記が確認される。「特種煙」・「特種弾」・「特種筒」がそれらである。上記「軍事極秘 昭和十四年七月 修水河渡河戦ニ於ケル特種煙使用概況 呂集団司令部」には、次に示した二つの表が収められており、この作戦で日本軍（第十一軍）が準備した化学兵器の種類が、これらの表から確定できる。

表1

集積地	特種弾葉集積計画抜粋			
	越山市	山口鋪	徳安	計
九四式山砲あか弾	四五〇	六三〇	〇	一、〇八〇
三八式野砲あか弾	七〇〇	七〇〇	一、四〇〇	二、八〇〇
四年式土砲あか弾	四三〇	一、七〇〇	四三〇	二、五六〇
九四式輕迫あか弾	三、七〇〇	九、九〇〇	一、三〇〇	一四、九〇〇

一九三七年七月「軍事極秘 昭和十四年七月 修水河渡河戦ニ於ケル特種煙使用概況 呂集団司令部」

(防衛庁防衛研究所所蔵)

表2

品目	集積場所		計
	九江	徳安	
特種發煙筒	一五、七六九	九、〇一五	二四、七八四
催涙筒甲	九三二二	三、二〇〇	一二、五二二
小發煙筒甲	八、六四一	三六〇〇〇	一、八六四一
水上發煙筒	七、七六〇	四〇〇〇〇	一、七六〇
發射發煙筒	三九、九八七	二、五五〇	四、五三七
特殊發射發煙筒	六四九	〇	六四九
晒粉	四、三二〇	四〇一	四、七二一
斥候用検知器	二、四三六	二〇	二、四五六
物料検知器	九二	六〇	一五二
一酸化検知器	三一	〇	三一
防毒具修理箱	三六	〇	三六
同 消耗品	二〇	〇	二〇
人用消毒包	七、二〇〇	〇	七、二〇〇
馬用消毒包	三、一八〇	〇	三、一八〇
音響警報器	五、六〇〇	〇	五、六〇〇
風 旗	二、五〇〇	〇	二、五〇〇
検知器消耗品	一、〇〇〇	〇	一、〇〇〇
大型發煙筒	六〇	〇	六〇
代用發煙筒	二〇	〇	二〇
小音響警報器	二、七〇〇	〇	二、七〇〇
吸収缶検査器	一、三〇〇	〇	一、三〇〇
長柄鎌	九四	〇	九四

化学戦資材集積現況表

昭和十四年三月一日現在
第七野戦瓦斯九江支隊

一九三七年七月「軍事極秘 昭和十四年七月 修水河渡河戦ニ於ケル特種煙使用概況 呂集団司令部」

(防衛庁防衛研究所所蔵)

上記の「(1)実施直前ノ状況」によれば、呂集団司令部が「特種煙ヲ使用スルコト」を決定したのは午後六時三〇分であり、その決定は各兵団に電命されている。正面作戦にあつた第百六師団が「特種筒」を使用開始し、完了したのが午後七時二〇分から同三〇分の一〇分間である。第百六師団は「特種筒」の砲撃完了と同時に渡河を開始して、九分後の午後七時三九分に先頭部隊が対岸を占領している。第百六師団の上陸に際して、「敵」(中国軍)からの射撃は一切なかつた。

呂集団司令部が使用を決定した「特種煙」と、その電命によつて上陸行動の直前に使用された「特種筒」はおそらく同一兵器と見なしてよい。これには日本軍の対岸上陸と同時に使用されていることから判断して、表2の「催涙筒甲」もしくは「水上発煙筒」などの催涙性兵器が該当するものと思われる。

注目されるのは、「(1)実施直前ノ状況」のなかの「一七三〇より虬津市附近一帯ニテ行ヒタル陽動部隊ノ発煙ハ好適ナル風向ニ送ラレ凸角一帯ヲ覆フ」とある箇所と、「(2)成果利用ノ状況」の冒頭の「特種弾ノ急襲射撃ニ続イテ」という箇所である。とくに、上陸作戦開始より二時間前の

午後五時三〇分に虬津から陽動部隊によつて発せられ、「凸角一帯ヲ覆」つた「発煙」の内容は、上陸に際して使用された「特種筒」とは明らかに別の種類の化学兵器と考えられる。また、使用時間は特定されないが、日本軍の上陸の準備射撃として中国軍陣地に「急襲射撃」された「特種弾」も、おそらく催涙性兵器とは別種のものであろう。岡村寧次はその戦場体験記録のなかで次のように述べている。³⁵⁾

作戦開始の三月二十日は、あいにく細雨であつたが、午後三時幕僚を伴つて、両師団後方の軍山という小山に登つて戦闘指導を始めた。十六時半全砲兵は予定通り射撃を開始した。三時間に亘る二百余門の砲兵が、統一指揮の下に火力を発揮したのは、わが軍としては、空前にして絶後ではあるまいか。

岡村寧次が幕僚とともに戦闘指導した場所の軍山は、虬津の東南東約八キロメートル、南濤鉄道(南昌・九江間、現在の向九線)の軍山駅の西方にある。「十六時半全砲兵は予定通り射撃を開始」とあるのは、前述した修水・潦河の交叉地帯への集中砲火をさしていると思われる。

化学兵器の使用について、岡村寧次の回想文は全くふれ

ていない。ただし、宮崎舜市の註記には、南昌作戦の整備と関連して、武漢侵攻の際に「発煙筒（催涙、クシヤミ性）資材も相当豊富であったが、多くの場合、散発小規模の使用に陥り、煙幕下の歩砲兵の戦闘も未熟であった」との反省から、「諸隊は攻撃準備中、集結地付近の民家にガス室を設けて装面の基礎教育をやったり、付近の沼沢で装面のまま折疊舟で漕渡や接岸突撃を練習した」との記述が補足されている。⁽²⁾さらに、宮崎舜市はまた次のようにも述べている。

軍砲兵隊二百数十門の二時間の準備砲撃、二万本の発煙筒の一斉放射、有力陸海航空隊の爆撃（当日になって天候不良のためとりやめとなったが）に次で、さらに渡河発航の時機を午後四時三十分と決めたのは、もし河岸の敵抵抗が破摧されない場合でも、煙幕に引続く日没によって、渡河を強行し得るとの着意からである。実に二重三重四重の保険をかけたつもりであった。⁽³⁾

この宮崎舜市の註記では、日本軍が使用した化学兵器は発煙筒（催涙、クシヤミ性）二万本となっているが、これは前述した上陸用の催涙性兵器（「水上発煙筒」・「催涙筒甲」）をさすものか、それともその約二時間前に虬津か

ら中国軍陣地「凸角一帯」に向けて発煙されたものか、特定されない。二万本という数量からすれば、表2の「備考一、右ノ外特種筒一〇、〇〇〇漢口ヨリ発射特種筒一〇、〇〇〇南京ヨリ九江ニ三月十九日以後到着セリ」中の「特種筒」および「発射特種筒」がこれに該当するものと一応考えられる。しかし、「クシヤミ性」の特種弾・特種筒といえ一般的には表1の各種「あか弾」（あか筒としても使用可能）をさす。「あか弾」は窒息性の毒ガスで、糜爛性の「きい弾」や無味無臭で致死性の「ちゃ弾」と違い、それ自体は殺傷性のものではない。だが、それを大量かつ継続的に吸入した場合、呼吸困難から死亡するに至る可能性は否定されない。少なくとも完全に戦闘能力を喪失せしめるものであったことは確かであろう。⁽⁴⁾「敵射撃ナシ」「虬津南方高地ヨリスル側射ナシ」という報告がこのことを示している。

なお、宮崎舜市が「渡河発航の時機を午後四時三〇分と決めた」とあるのは、作戦立案段階の決行時機か、あるいは作戦開始（準備砲撃）時機との混同か、さらには現地時間と日本時間との時差か、明らかでない。

この点に関して、資料Aの『抗日戦争簡史』は日本軍が

気球を用いて気象観測をしていたことを記述している。³⁵⁾また、同書は三月二十日の修水渡河作戦での毒ガス弾使用はふれていないが、後述する中国国民党軍の南昌反攻において、同年四月二十七日に日本軍飛行隊が毒ガス弾を使用したことを指摘している。³⁶⁾また、資料Bの「永修県志」は日本軍の修水渡河作戦で日本軍が「毒気筒」・「毒気弾」・「小発煙筒」・「紅一号」を使用したと記述している。³⁷⁾このうちの「紅一号」は表1中の「あか弾」に相当するものと考えられる。ただし、前述したように「永修県志」はその性格上、基礎となる資料などの注記がない。また、「紅一号」がどの時点で使用されたのか不明瞭である。しかし、これら中国側資料と、さきに引用した防衛庁資料「軍事極秘 昭和十四年七月 修水河渡河戦ニ於ケル特種煙使用概況 呂集團司令部」所収の上記引用資料との間に矛盾はない。

四 上高会戦と「三光作戦」

岡村寧次を軍司令官とする日本軍（第十一軍・呂集團）は一九三九年三月二十七日南昌を占領した。岡村寧次は一九四〇年三月十七日に軍事参議官に任命されて漢口を去り、

帰国して、同月十七日に軍状を「上奏」した。次に示したのがその一部分である。³⁸⁾

昭和十三年盛夏ノ候第十一軍統率ノ
大命ヲ拝シテ著任致シマスルヤ時正ニ武漢攻略戦準備
ノ機ニ際会致シマシテ七月末ヨリ九月初ニ巨リ逐次地
歩ヲ推進シ概ネ広済、瑞昌、廬山ノ線ニ進出シテ集中
ヲ完了シ九月中旬第二軍ノ大別山系北麓方面ヨリスル
繞回作戦ト協力致シマシテ長江南北ノ地区ヲ西進シ百
箇師ニ余ル敵軍ヲ撃碎シ十月下旬武漢ヲ攻略シ茲ニ作
戦約四ヶ月ニシテ中原ヲ戡定致シマシタ
武漢攻略戦後第二軍ノ精銳ヲ隸下ニ入ラシメラレマシ
テ兵馬ノ充実ヲ図リ次デ南昌ノ攻略ニ任ジ昭和十四年
二月末先ヅ敵軍數箇師ヲ漢水左岸ニ破リ安陸ヲ攻略シ
次デ三月下旬主攻撃正面ニ強大ナル戦力ヲ統合致シマ
シテ修水南岸ノ敵陣地帯ヲ突破シ作戦七日ヲ以テ南昌
ヲ陥レ約十箇師ノ敵軍ヲ潰滅致シマシタ
南昌攻略戦ノ末期ニ至リ敵軍ノ四月攻势ノ徵ヲ認メ直
ニ兵力ヲ江北ニ転用シ隱忍敵ヲ牽制抑留スルト共ニ五
月初頭ヨリ攻势ニ移リ襄東ノ野ヲ馳驅シテ一意敵軍殲
滅ニ邁進致シ作戦三週日ヲ以テ約二十箇師ノ敵ニ決定

的打撃ヲ与ヘマシタ

裏東会戦以降殆ンド毎月ニ亘リ敵軍ノ行ヒタル攻勢ハ其ノ実績殆ンド強力ナル游撃ノ程度デアリマシタガ五十箇師ヲ有スル江南敵軍ノ蠢動漸ク活発ヲ加フルニ至リマスルヤ之ヲ贛湘北境ノ地域ニ撃滅センコトヲ企図致シマシテ九月中旬先ヅ高安附近ニ数箇師ヲ殲滅シ一部ヲ以テ洞庭湖方面ヨリ主力ハ岳州、通城正面ヨリ約一箇年ニ亘ル対陣状態ノ敵陣ヲ突破シ作戰概ネ一箇月十余箇師ニ潰滅的打撃ヲ加ヘ敵軍衰退ノ促進ニ多大ナル寄与ヲ致シマシタ

統一テ昨年来敵軍ハ冬季攻勢ヲ呼号シテ各正面一斉ニ進攻ニ転シマシタガ軍内各兵团ハ五旬ノ久シキニ亘リ寡兵克ク南北ニ転戦致シマシテ敵軍進攻ノ鋒銳ヲ破碎シ約七十箇師ニ及ブ敵ノ妄動ヲ完膚ナク撃推シテ偉大ナル戦果ヲ収メ其ノ企図ヲ画餅ニ帰セシメマシタ

目下敵ハ正規軍百余箇師ヲ以テ軍ヲ圍繞シ作戰地域内亦十余万ノ匪軍ヲ算シ依然蠢動ヲ継続致シテ居リマシガ軍ハ其ノ任務ニ鑑ミ曩ニ政戦両略上ノ見地ニ基キ新態勢ヲ決定致シ戦力ヲ更張シテ隨時ノ作戰ニ即応ノ準備ヲ整ヘ形而上下ニ亘リ任務ノ完遂ニ遺憾ナキ狀況ニ

御座イマス

伏シテ惟ミマスルニ軍ガ武漢攻略戦以来数次ノ会戦ニ於テ幸ニシテ克ク所期ノ目的ヲ達成シ得マシタルハ是偏ニ御稜威ノ然ラシムル所デ御座イマシテ洵ニ感激ノ至リニ堪ヘマセン

尚麾下將兵一同克ク奉公ノ誠ヲ竭シ炎暑瘴癘ヲ冒シ困苦欠乏ニ堪ヘ長期ニ亘リテ志氣愈々旺盛各々其ノ職責ヲ完遂致シマシタノハ終生感謝ニ堪ヘナイ所デ御座イマス

唯此ノ間

陛下忠勇ノ股肱中戦死約一万三千名戦傷約三万七千名戦傷病死約七千名ヲ出シマシタノハ衷心恐悚ノ至リニ堪ヘナイ次第デ御座イマス

寧次

岡村寧次が第十一軍司令官に任じられた一九三八年六月から、この「上奏」までの約一年九カ月に第十一軍が受けた兵力の打撃は、末尾にある通り、戦死・戦傷病死約二万人、戦傷約三万七千人にのぼる。両者の合計数は五万七千人である。この数値は、呂集團作戦（第十一軍）が当時の日本軍部・日本政府にとっていかに重要視されていたかを

如実に物語っている。

この「上奏」にもあるように、蒋介石・国民党軍及び共產党軍（新四軍）は、南昌陥落から一ヶ月後の一九三九年四月二十一日、南昌奪回のための大規模な反攻に転じ、同年五月五日までには飛行場・南昌車庫を占拠し、南昌城への突入をはかった。日中両軍は白撃戦の末、飛行機・重砲・機甲部隊などの戦力にまさる日本軍によって、中国軍は大打撃を受け、同月九日、南昌反攻を停止した^④（文末図2「南昌反攻戦経過要図」^④参照）。

この後、日本軍は前節で言及した呂集団作戦の作戦範囲（信陽・武漢・岳州・南昌）の面的支配を確保するため、信陽を拠点とした河南省大別山地での掃敵作戦（襄東作戦一九三九年五月）、さらに江西省贛江から湖南省湘江までの両省にわたる中国軍陣地に対する正面作戦（贛湘作戦、一九三九年九月から同年一〇月）を展開した^⑤。しかし、岡村寧次の「上奏」に、「目下敵は正規軍百余箇師を以て軍を囲繞し作戦地域内亦十余万の匪軍を算し依然蠢動を継続」とあるように、日本軍による作戦地域の面的支配はなお確立していなかった。

一九四一年一月、安徽省南部で蒋介石・国民党軍が共産

党新四軍を包囲攻撃するという事件が発生した。いわゆる「皖南事件（新四軍事件）」である^⑥。この事件は、日本側に呂集団作戦の目的を達成するための機会を与えた。それが以下に述べる上高会戦である。

上高会戦は岡村寧次が帰国した後の戦闘であったため、これまで参考としてきた岡村寧次の戦場体験記録も松木繁の伝記もふれていない。また、防衛庁防衛研究所にも、呂集団（第十一軍）関係資料にはこの上高会戦に関する独立した冊子（綴）はない。『現代史資料 日中戦争2』には一九四一年十一月二十五日付の呂集団（第十一軍）参謀部作成の「敵の抗戦力及作戦指導の新傾向」^⑦が収められているが、この文書にも上高会戦について言及した箇所はない。

上高会戦は一九四一年三月十五日から同年四月二日まで展開された。この戦闘の経過については、当時中国側第九戦区司令官であった薛岳が、前掲の『江西文史資料選輯 江西抗戦親歴記』に「上高会戦」と題する回想文を寄せている^⑧（資料Cおよび文末図3「上高会戦経過要図」^⑧参照）。

この薛岳の回想によれば、日本軍は、上高に布陣する中国側の野戦軍を撃破して上高を攻略するために、三月十二

日から十四日にかけて厚田街、西山万寿宮および港口・左家・千州街の三地点に兵力を集中し、翌十五日早朝、上高に向けて南北両方から一斉に攻撃を開始した。西山万寿宮から進撃した日本側中路軍は大城・赤土街を侵犯して十九日には楊公圩・墓田圩に達した。だが、二十一日、日本側中路軍は官橋街を過ぎたところで中国軍と激しい戦いとなつて、それ以西の進撃を阻止された。日本側南路軍も中国軍の抵抗を受けつつ、二十三日に錦江を渡って日本側中路軍と合流したが、中国軍はこれを包囲する態勢で日本軍の西進を阻止した。二十五日、日本軍は牛行（南潯鉄道駅）から千余、さらに奉新から二千余の援軍を派遣して、この包囲攻撃に対抗した。この攻防戦は二十五日から数日間続いたが、中国軍が徐々に日本軍の前線に打撃を与え、三十日にいたって日本軍は作戦目標であった上高に到達せず全線崩壊のかたちで南昌・奉新の自陣地に退却した。

この上高会戦は中国中南部を支配しようとした日本側にとっても、これに抵抗した中国側にとっても重要な戦闘であった。日本はこの前年の一九四〇年九月、インドシナを侵攻するとともに日独伊三国同盟を調印し、これに対してアメリカは同年十月に屑鉄の対日禁輸を実施して対抗した。

つまり情勢は日本が対英米仏に対して宣戦する段階へとすでにその一步を踏み出しつつあった。したがって、日本が軍事的に呂集団作戦の目標を達成できるか否かは、対欧米関係、さらに対ソ連関係に重大な影響を与えるものであった。中国側もまた、この会戦のもつ重要性を認識していた。

当時上高県政府を指導していた王道平は『江西文史資料選輯 江西抗戰親歴記』所収の回顧文で次のように述べている。

上高は江西省の西北を掌握する要衝であり、軍事的拠点である。当時我が方の抗戦部隊第九戦区前敵総指揮兼十九集團軍總司令の羅卓英はここに駐在していた。もし、日本軍が上高を占領すれば、たんに国民党主力軍に重大な打撃を与えるだけでなく、西に向かって湖南省長沙を攻めることを日本軍に可能とさせ、九戦区全線が動揺もしくは崩壊の形勢となる。それ故、上高は敵・我方双方にとって、ともに「必争之地」であった。

結果として、日本軍の上高侵攻・占領作戦は中国軍の抵抗によって失敗した。その後、日本軍（呂集団）は太平洋戦争直前の一九四一年九月と、太平洋戦争開始後の同年十

二月末の二度にわたって長沙への侵攻作戦を実施するが、蔣介石・国民党中央軍に対して決定的な打撃を与えることが出来ないで終わった。日中戦争はここに全くの対峙段階へと移行したのである。

日本軍は中国軍による呂集団作戦地域の包囲を破れなかっただけではない。その作戦地域で活動する「十余万の匪軍」の「掃討」にも基本的に成功しなかった。日本軍の「掃討作戦」の実態の一端は、『永修県志』（資料D）が「日軍暴行」と題して発表している。これによれば、永修県だけで一九三九年から一九四五年までの七年間に日本軍によって殺害された同地区住民は、二万余人に達し、そのなかには一、三九八人の児童が含まれている。また、南昌県塘南地区については『江西文史資料選輯 江西抗戦親歴記』に南昌県政治協商会議が調査した報告⁽⁶⁾が収められている。だが、筆者はまだ江西省全体の被害数値を示した資料の存在を知らない。

おわりに

太平洋戦争の末期、江西省北部に駐留していた日本軍は、

最後の大規模な侵攻作戦を展開した。一九四五年一月、湖南省境の蓮花・永新・遂川の各県城を占領、二月には江西省中南部の中心贛州を陥落させた。しかし、日本軍の南下攻勢は広東省境の信豊で阻止され、七月には贛州から撤退し、八月、南昌で日本の敗戦をむかえた。

松本繁氏の伝記によれば、岡村寧次は一九四一年七月に北支那方面軍司令官として再度中国大陸の前線にもどり、南京で日本の敗戦処理交渉を蔣介石と行った。岡村寧次はそのまま引き続き中国にとどまり、一九四九年二月、上海軍事法廷で無罪判決を得た後、日本へ帰還し、一九六六年に八二歳で亡くなった。

日本敗戦後の中国における国・共内戦と日本との関係、その時期の国民党政権による江西省開発計画とアメリカとの関係その他、なお論ずべき問題が残されているが、別稿に譲りたい。

〔注〕

- (1) 『奈良史学』九号、一九九二年十二月。
- (2) 小此木真三郎『帝国主義とファシズム』、一九七二年、青木書店、一頁。

(3) 古屋哲夫『日中戦争』、一九八五年、岩波新書。江口圭

- 一 「十五年戦争小史新版」、一九九一年、青木書店。
- (4) 安井三吉「盧溝橋事件のイメージ」『日本史研究』三〇号、一九九四年四月。
- (5) 臼井勝美「日中戦争」、一九六七年、中公新書。
- (6) 石島紀之「中国抗日戦争史」、一九八四年、青木書店。
- (7) 「現代史資料9 日中戦争2」、一九六四年、みすず書房。
- (8) 稲葉正夫編「岡村寧次大将資料 上巻 戦場回想篇」、一九七〇年、原書房。
- (9) 松木繁著「支那派遣軍総指令官 岡村寧次大将」、一九八四年、河出書房新社。
- (10) 稲葉正夫、前掲書、一一二頁。
- (11) 松木繁、前掲書、一一四頁。
- (12) 同右、一一四頁。
- (13) 「永修县志」、江西省地方志丛书、江西省永修县志编纂委员会、一九八七年六月。
- (14) 「江西文史資料选辑 第十六辑 抗日将領回忆 江西战史(一)」、中国人民政治协商会议江西省委员会文史資料研究委员会編、一九八五年六月。
- (15) 虞奇編著「抗日戦争簡史」、一九七六年、黎明文化事業公司。
- (16) 「回忆国民党政府资源委员会」、全国政协文史資料研究委员会工商经济组、一九八八年、中国文史出版社、七六頁。
- なお、この計画については奥村哲氏が言及している(同氏
- 「抗日戦争と中国社会主义」『歴史学研究』六五一号、一九九三年、一七四頁)。
- (17) 「十年來之全國經濟建設」、中華民國史料叢編、一九三七年(一九七六年影印初版)、一頁。
- (18) 前掲「回忆国民党政府资源委员会」、八一頁。
- (19) 「贛政十年」、熊主席治贛十周年紀念特刊、一九四一年十二月、江西省图书馆所藏。
- (20) 前掲「回忆国民党政府资源委员会」、八二頁。
- (21) 稲葉正夫、前掲書、二二八―二二九頁。
- (22) 同右、三三四頁。
- (23) 同右、三三三―三三三頁。
- (24) 前掲「現代史資料9」、二七二頁。
- (25) 同右、二七一―二七二頁。
- (26) 稲葉正夫、前掲書、三三四―三三五頁。
- (27) 前掲「江西文史資料选辑 第十六辑」、一〇頁。
- (28) 防衛庁防衛研究所図書館蔵「昭和十四年三月十日 四月十日南昌攻略戦作戦経過ノ概要 呂集团司令部」(大野史料)。
- (29) 稲葉正夫、前掲書、三三八頁。
- (30) 防衛庁防衛研究所図書館蔵「軍事極秘 昭和十四年七月修水河渡河戦ニ於ケル特種煙使用概況 呂集团司令部」。
- (31) 稲葉正夫、前掲書、三三五頁。
- (32) 同右、三三八―三三九頁。
- (33) 同右、三三〇頁。
- (34) 毒ガスに関する記述は大川淳三氏(国家公務員等共済組

合連合会 旧今年金部ガス障害調査委員会委員)の体験談によった。

- (35) 虞奇、前掲書、三一五―三一八頁。
- (36) 同右、三二一頁。
- (37) 前掲《永修县志》、三三三頁。
- (38) 稲葉正夫、前掲書、三六〇頁。
- (39) 防衛庁防衛研究所図書館蔵「昭和十三年夏 十四年九月 第十一軍軍状上奏 11A司令官、陸軍中将 岡村寧次」。
- (40) 虞奇、前掲書、三一八―三二一頁。
- (41) 掲書《江西文史資料選輯 第十六輯》、五四頁。
- (42) 稲葉正夫、前掲書、三四四―三四九頁。
- (43) 石島紀之、前掲書、一三四―一三五頁。
- (44) 前掲『現代史資料 9』、五一〇―五一五頁。
- (45) 前掲《江西文史資料選輯 第十六輯》、五五―五七頁。
- (46) 同右、八〇頁。
- (47) 同右、六五―七四頁。
- (48) 前掲『現代史資料 9』、五一六―五四二頁。
- (49) 前掲《永修县志》、三八四頁。
- (50) 前掲《江西文史資料選輯 第十六輯》、一七四―一八〇頁。
- (51) 田和勇《江西抗战大事記》《江西文史資料選輯 第十八輯》、中国人民政治协商会议江西省委员会文史資料研究委员会編、一九八五年十二月、一六二―一六四頁。
- (52) 松木繁、前掲書、三四五頁。

付記

本稿は筆者が本務校奈良大学の在外研修制度により、一九九二年三月から一九九三年三月まで、中華人民共和国の江西大学(江西省南昌市、現南昌大学)において研究学者として調査・研修した成果の一部である。

本稿作成にあたり広島県竹原市大久野島毒ガス資料館(館長村上初一氏)において大川淳三氏から毒ガス製造当時の貴重な体験をお教えたいただいた。また、防衛研究所図書館では、戦史部史料班長永江太郎氏、および図書館防衛庁事務官斎藤照男氏から便宜をはかっていただいた。末尾ながら感謝の意を表します。

A 《抗日战争简史（上）》 虞 奇编著，黎明文化事业公司出版，1976.10

民国二十七年秋武汉会战时，敌原计划于攻略武汉之同时攻略南昌，因其第一零六师团在万家岭惨败，致南浔线之兵力不足，遂停止于德安附近，旋其第二军司令部复员回国，由其第十一军（以七个师团为基干）任武汉方面之作战。其第一线在信阳、旧口、岳阳、德安各附近之线，与我第五、第九战区对峙。双方竞相整补，准备尔后之作战。

二十八年二月，敌第一零一、第一零六师团向德安以南地区，第六师团主力向浚溪附近，第一一六师团一部及舰艇数十向湖口附近集中；其进攻南昌遮断浙赣铁路之企图，逐渐明朗。我军委会判断其开始进攻之时机，约在三月十五日以后。蒋委员长为力保南昌掩护浙赣路，三月八日令第九战区准备向赣北之敌攻击，预定于三月十五日开始攻击，以制敌先机。第九战区以整补未毕，补给困难，迭电请求展期。蒋委员长因该区既不能先发制敌，遂于三月十四日指示守势作战机宜，要旨如左：

1. 武宁方面以必要兵力为限，南昌方面须控制强大兵力，第二十集团军之第三十二军仍控制于南昌附近，归第十九集团军指挥。

2. 第一集团军之使用，应根据桂林行营之作战计划，务求自主使用，勿轻易投入战场。

3. 第三战区应时时注意南浔路方面之战况，并准备适时以有力部队支援该方面之作战。

4. 对于鄱阳湖之湖汊及南昌附近之河川，应从速加强封锁，切实警戒之。

5. 武宁、修水至平江公路，应澈底破坏。

第九战区以第十九集团军罗卓英部任南昌方面之守备，右与第三战区之第二十九军阵地相联系；第三十集团军（第七十二、第七十三、第七十八军）任武宁方面之守备；第三十一集团军任鄂、湘北方面之守备；第一集团军及第七十四军控制于醴陵、浏阳及长沙附近为机动部队；湘鄂赣边区游击部队主力在武宁以北山区，一部分散敌后游击。

三月十七日，敌第一一六师团一部，海军陆战队数百，在敌舰三十余艘，汽艇五十余只及飞机支援下，由鄱阳湖水道向吴城镇方面进攻；同时永修方面敌第一零一师团一部向涂家埠进攻。我第三十二军右翼与鄱阳湖警备部队协力固守阵地，激战至

二十三日，敌未得逞，尤以第一四二师傅立平部确保涂家埠，杀敌最多，战绩卓著。

三月十八日薄暮，永修、张公渡间敌主力（第一零一师团主力及第一零六师团）开始攻击，先以优势炮兵（约二百门）依气球观测，猛烈炮击一昼夜，二十日强渡修江，该正面我守军第七十九、第四十九军各以一师为第一线，正面对攻，火力薄弱，然勇战奋斗，迭施反击，激战至二十三日，伤亡过半，卒被敌突破；第七十九军主力（两师）因潦水暴涨敌阻，仅先头一部渡过潦水增援，同时第四十九军控制之一师急进至安义以北地区增援，而敌机械化部队行动迅速，我军兵力分离零落，无法构成整然阵地；敌遂乘势进陷安义，二十四日续陷万家埠及奉新，乃以主力向左旋回，进逼南昌。

此时，我第三战区已抽调第一零二师扼守南昌至奉新间之公路，阻止敌人，甫经到达，被敌压迫向丰城后退；第十九集团军令第三十二军由涂家埠方面经乐化退守南昌；敌先头部队由南昌西南方之新洲、生米街迂回，渡过赣江，我第三十二军仅有两团到达南昌，一部尚在赣江以西与敌激战，军主力向南转进中。二十七日敌猛攻南昌，我军与敌巷战甚烈，牺牲惨重，是夜奉令向进贤撤退，南昌陷落。

先是，第九战区令第一集团军及第七十四军增援，二十七日先头部队到达高安东北方祥符观、会埠街附近地区，与敌第一零六师团接触，旋以南昌陷落，遂在高安西南侧地区占领阵地，与敌对峙。同时第十九集团军令柘林以南之第七十军向靖安方面之敌侧击，使第七十九军经大城附近向西南方突围，该军随即向上高转移，第四十九军撤退上高后，旋即转移于高安以东锦江南岸地区。

武宁方面，敌第六师团主力于三月二十日由峽溪向武宁东北方我第七十三、第八军阵地攻击，二十一日，敌一部由津口南渡修江，攻击我第七十八军阵地。我军坚强抵抗，迭施逆袭，战斗激烈，双方伤亡甚重，相持至二十七日，我军为策应南昌方面之作战，抽出第八军向南浔铁路及瑞昌挺进，袭击敌后方，以第七十二军接替第八军及第七十三军阵地，抽出第七十三军控制整理。敌乘机向我第七十二军阵地猛攻，并向第七十八军右翼包围攻击。该两军逐次后退，于二十九日放弃武宁，退守武宁西方之甫田桥、烟港街阵地，敌停止于武宁附近，战斗中止。

B 《永修县志》 江西省地方志丛书，江西省永修县志编纂委员会，1987.6

〈修河保卫战〉

民国二十七年（一九三八年），日本侵略军（下简称日军）攻占德安后，以德安为据点，集结兵力，迫近修河，企图进犯南昌。

十月三十日，蒋介石抵南昌，批准薛岳兵团退至修河南岸，与日军隔河对崎。并部署第三、第九两战区抽调五个军以上的兵力，固守修河，确保南昌。计有三二军宋肯庸部，辖第三九师（师长李兆瑛），第一四一师（师长唐永良），第一四二师（师长傅立平），布防在南昌之滨的鄱阳湖地带，军部驻蛟桥；第四九军刘多荃部，辖第一〇五师（师长王铁汉）、预备九师（师长张言传），布防在南浔线上；第七〇军李觉部，辖第一九师（师长李觉（兼））、第一〇七师（师长段笏）、第七九军夏楚中部辖七六师（师长王凌云）、第九八师（师长王甲本）、第一一八师（师长王严）、布防修河南岸；第七四军俞济时部，辖第五一师（师长王耀武）、第五八师（师长冯圣法）、第六〇师（师长陈沛），德安张占岭战役后，调湘赣公路整体；以及鄱湖警备部队（司令周源），总兵力号称十万大军，统归第一九集团军总司令罗卓英指挥，总部设南昌。

国民党部队除罗卓英总部附有独立的炮兵外，各军师仅有轻炮营和迫击炮连队；各军师工兵只有架桥、破路设备。无空军参战。

日军指挥为冈村宁次中将。其兵力有：第六师团井上支队、师团长稻叶四郎中将，进攻武宁；第一〇一师团，师团长斋藤弥平太中将；第一〇六师团，师团长松浦淳六郎中将，第一一一军直属部队，进攻南昌；村井支队，在鄱阳湖水面作战。此外，日本空军有：菅原飞行团的二个侦察中队、二个战斗中队、五个轻轰炸中队，及寺仓飞行团之一部分。

战斗前夕，修河前线我方守备部队为四九、七〇、七九共三个军。四九军居中，担任守备右自馒头山、太子岭、虬津渡、张公渡一线。右以馒头山以东与七九军相衔接；左以张公渡以西与七〇军相衔接。其时四九军正面守备由一〇五师担任；而一〇五师则以三一三、三一五两旅并列防；两旅又各以一团轮守正面。我方阵地在五个月的时间里，从修河南岸涂家埠至柘林一带，沿着接连河岸的斜坡；构筑纵横达数十公里的防御工事。特别是涂家埠段，防守严密，使日军进攻受挫，消耗了大量

弹药，伤亡惨重。加上南浔路从南昌到涂家埠路基被我军破坏殆尽，坑井连绵，车辆运输无用武之地，因此，日军不再以涂家埠段为突破口，而将渡河的重点改为虬津以下我军设防较弱的观音阁，并多次派遣炮兵、步兵和空军，以重炮、坦克及烟雾喷射器向我方作正面攻击。

民国二十八年二月，敌军为了巩固武汉、截断浙赣铁路，积极部署进攻南昌。敌一〇一师团陆续沿德安、星子公路和南浔铁路向德安、永修以西虬津附近一带集中。敌军第一〇六师团主力也同时由湖北阳新向永修虬津方向移动，二十四日，敌师团司令部已进至艾城以西之越山村。

三月十七日下午，敌军第一〇六师团，以舰艇约百余艘，陆战队数百名，飞机几十架作掩护，向吴城镇进攻，遭到守军预备五师和唐永良一四一师拼力阻击。敌一〇一师团，于同日向涂家埠傅立平一四二师猛攻，激战八、九日，向我方阵地发射一、〇〇〇多发催泪毒弹，守军伤亡惨重，受挫后退。

二十日，天降小雨，午后三时，日酋冈村宁次登上军山，亲自指挥战斗。四时三十分，日军一〇六师团和一〇一师团以重、轻炮二百数十门同时急袭，炮击达三小时，于晚八时左右强渡修河，与我守军夏楚中等部发生激战。至次日黎明，日军突破纵深二公里的前沿阵地。

三十一日，敌军在北岸升起气球，指示二〇〇多门轻重炮向我馒头山、太子岭一带阵地集中袭击，炮火密度，超过上海、苏州河之役。在炮火袭击中，日军使用毒气筒一五、〇〇〇个，毒气弹三、〇〇〇个，小发烟筒五、〇〇〇个，并动用“红一号”的二苯代肼腈，是当时一次最大规模的化学武器战。同时敌机不断临空轰炸，沿河阵地工事被摧毁殆尽。同日，日军在四〇架飞机掩护下，向修河左侧观音阁一带防线猛攻。守军刘、蒋、桑三营长相继阵亡。日军渡河攻到第三道防线，第七六师师长凌云亲自督战，将日军打退至距河岸二十余里处。由于日军战车已渡河，列队络绎冲击，三道防线被突破，突破口达两公里多长，侵入战车数十辆、骑兵七、八百人，我军无力抵抗，向后溃退。联防的第九八师、第一一八师相继向东南后撤；七九军左翼联防的四九、七〇两军也同时不战而退。九战区前敌总部亦未能及时督促后撤部队对敌展开堵截，因此修河防线全线溃败。二十二日日军占领滩涂。

二十三日，敌海、陆、空军分三面进攻吴城镇，我第一九集团军商震三二军与日军激战数小时，终因敌已由该镇之望湖亭以左突破阵地，吴城镇沦陷。

同日，敌军第一〇六师团，除步兵大部分留守濂溪外，余以战车为前导，分成几个纵队向我军急追，一路攻安义县城和万家埭，进逼南昌；一路沿古大道向安义、靖安猛扑，并以坦克掩护轻便部队，沿公路向南昌迂回。因张公渡至南昌一线，均为平原，易攻难守，加上公路事先未作破坏，致使日军战车长驱直入。二十七日下午七时，进占安义县城。晚上十一时三十分日军冲入奉新，又未遇抵抗而直到南昌。整个战役一点突破，全线皆溃，中国军队放弃全部河防，至此修河保卫战，以南昌失守而告终。

C 〈上高会战〉薛岳，《江西文史资料选辑 第十六辑 抗日将领回忆 江西抗战亲历记》，中国人民政治协商会议江西省文史资料研究会编，1985.6

敌困于我持久消耗战略，遂取以攻为守之策，由全面进攻，变为局部侵扰；三十年（一九四一年）三月，发动所谓鄱阳湖扫荡战，企图攻略上高，摧毁我野战军，乃以由长沙下游新增之第二十混成旅团，集结厚田街，是为南支队；第三十四师团，除留一部守原阵地外，主力集结西山万寿宫，是为中支队；第三十三师团之二一四连队二一五连队，及炮工连队各一部，集结港口、左家，及干州街，是为北支队。各路于三月十二日开始行动，十四日集结完毕。

三月十五日拂晓，南路敌由厚田街渡蒲江，北路敌犯奉新，与一〇七师十九师对战；十七日，南路敌被五一师一〇七师于独城、坑、襄胡节节截击，中路敌开始犯大城、赤土街，北路敌窜伍桥河，被十九师预九师节节阻击；十九日，南路敌，被五一师阻击于英风岭、来脊岭、石头街；中路敌窜至杨公圩、墓田圩，我七十四军之五十七师五十八师，已进入泗溪、官桥街、棠浦阵地，警戒部队已与敌接触；北路敌，被十九师预九师于华林寨苦竹坳连日截击围歼，伤亡甚众，向东回窜，敌右臂遂先折；二十一日，中路敌突过官桥街，被我五十七师五十八师于官桥街西南地区歼灭甚众，阻于东港、三坡桥、樟树下、白茅山之线未获寸进，南路敌，被五十一师阻击于石头街、华阳，至二十三日，歼其大半，残敌渡蒲江与中路台股，至是南中两路之敌，

悉被困于官桥街一隅，其时四十九军之二十六师，由赣江东岸经清江向灰埠急进，一〇五师在后跟进，七十二军由修水经雷市向水口圩急进，第十九师预九师，向杨公圩、官桥街急进，且占官桥街，二十四日，十九师进占杨公圩，预九师进占官桥街西南，七十二军进占水口圩东南，反包围势成，敌倾全力猛扑石洪桥下坡桥，被我五十七师五十八师又歼灭甚众，其势大挫；二十五日，牛行（今名昌北）之敌千余，以汽车西逃急援，奉新之敌二千余，增至棠浦，被困之敌，逐渐会集官桥街，期与援敌合力作最后挣扎，其时一〇五师由灰埠，二十六师由卢家圩，石头街，五十一师由界埠，北渡锦河，分向龙田圩，杨公圩，泗溪，准备截击败退之敌；合围各部，以官桥街为目标，四面环攻，敌酋大贺因伤兵二千余未及后送，乃驱残卒千余，于二十七日午向我第十五师一〇七师（于经英冈岭集结上高时归七十四军指挥）正面离楼谢反噬，我稍却，迄夜，敌遂开始东溃；二十八日，七十四军攻占泗溪、官桥街，七十二军攻占棠浦，残敌几全被歼，其少将步兵指挥官岩永重伤，大贺仅以身免。第四十九军于龙团圩，杨公圩，第七十军于杨公圩，村前街间，截击败敌，至三十日，将敌击溃，迄四月二日，第四十九军逐次追占高安、祥符观、西山万寿宫、赤土街，第七十军逐次追占村前街、奉新儒里温村。

按战区二十九年（一九四〇年）五月所策定之反击作战计划：“敌如进犯高安、上高、万载，则诱之于分宜、上高、宜丰以东地区反击而歼灭之。”策定反击作战指挥要领，预于抚河东之罗舍渡经市汉街沿锦河南岸巨高安以东，奉新、靖安以西，及抚河东之李家渡经丰城英冈岭石头街泗溪棠浦迄九仙汤线以东中间地区，构成三线阵地，命七十军为诱击兵团，于第一第二两阵地带阻击消耗敌力，诱敌深入后，转于外翼侧击，七十四军为决战兵团，俟诱敌至第三阵地带时，与敌决战，协同各兵团合击歼灭之，并大胆抽调赣江东岸之四十九军，适机参入灰埠卢家圩及龙团圩杨公圩之截击，抽调修水之七十二军，适机参入官桥街方决战之，规画划详确，任务分明，各部又奋勇用命，其克敌非偶然也。又敌分数纵队深入，全部聚集官桥街时，无异深入口袋，我坚定决心，以逸待劳；选择战场，以静制动；以反包围答复敌之包围；以歼灭战答复敌之扫荡战；亦为成功要素。

D 《永修县志》 江西省地方志丛书，江西省永修县志编纂委员会，1987.6

〈日军暴行〉

日本侵略军攻陷永修时，提出：“烧杀以助军威，奸淫以助军乐，抢劫以助军食”的法西斯口号。据缴获日军文件中记载。其指令有：“1.当地居民不得接近皇军驻地，违者一律格杀勿论。2.粮秣器具实行就地征发。3.滩溪附近村庄，须完全烧毁。4.行迹可疑之居民须彻底屠杀。”永修人民惨遭荼毒。

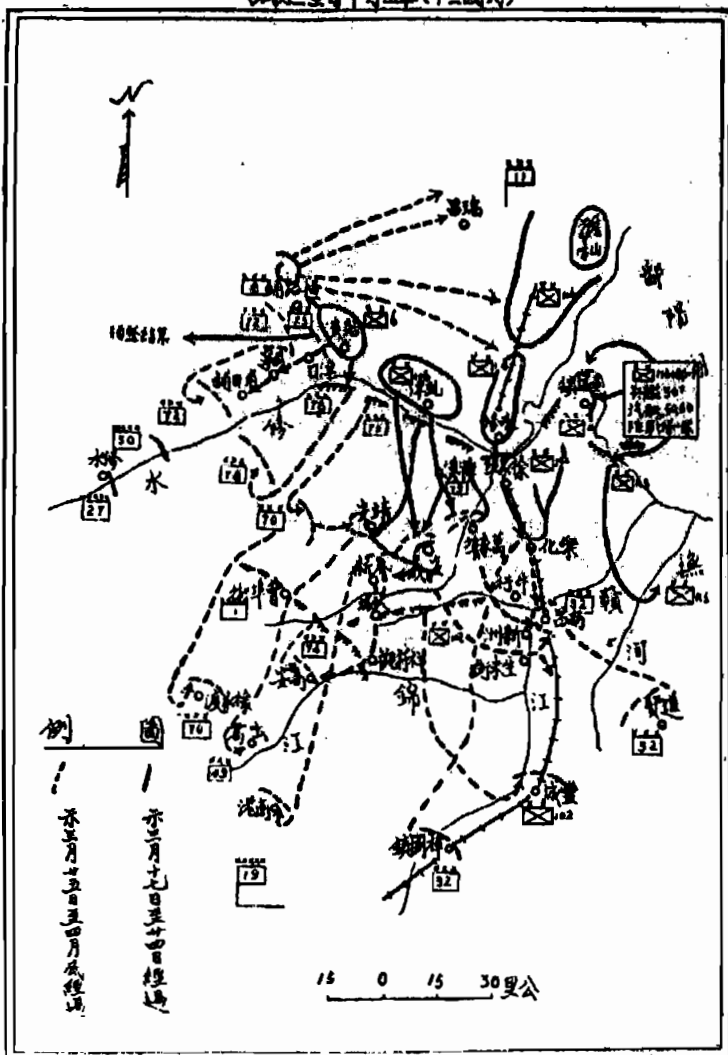
一、烧光 民国二十七年冬，日本侵略军攻陷永修，所到之处，见屋便焚，火光冲天，烟雾弥漫一〇余日。黄家岭、大路边一带村落，尽成焦土，无一幸存。民国二十八年三月二十二日，日军从张公渡进犯滩溪，先以飞机轮番轰炸，张公渡六〇余户的村庄被毁。日军进犯吴城镇，军舰驶入饶河口，用大炮猛轰，飞机滥炸，扔下大量燃烧弹，引起大火连烧三天三晚，街坊民屋，损失殆尽，最后只剩下天主堂附近一〇%的房屋幸免。日军占据涂家埠，纵火焚烧，全镇仅剩上街头店房一间。总计七年中，全县烧毁房屋一二、五四五栋。

二、杀光 民国二十八年三月二十三日，日军从张公渡进犯安义，公路上有二〇〇多逃难群众，扶老携幼，至云山水坵附近，被日军包围，在一坵稻田里，用机枪扫射，集体枪杀，无一幸存。藕潭刘家一夜被惨杀四〇多人。青山刘家全村共四八人，被机枪扫射，一次杀害四七人，仅一人幸免。大屋朱村，连烧带杀，五〇余人死于刀下。城山驻敌，一次抓获无辜老百姓一〇〇余人，在安义万家埠用机枪扫射而死。驻涂家埠的日军宣抚班，用麻布袋装上无辜群众二〇余人，绑上石头，丢进河里活活淹死。涂埠上街头徐家，一次被日军淹死五人。民国二十九年冬天，日军在柘桐树刘村掠掠，将刘姓婆媳二人奸污毙命。艾城陈法榜之妻，一次遭七个日兵奸污。艾城南门龙诗介被日军割去耳朵致死。朱克凤兄弟俩在艾城北门，被日军用刺刀挖心而死。王洪梓四人，被日军捆绑在艾城河边，用刀砍头抛入河中。七年中我县同胞被日军惨杀者共达二〇、五二三人。其中男一六、五〇五人，女二、六二〇人，儿童一、三九八人。

三、抢光 永修沦陷后，全县被日本侵略军抢去稻谷六〇五、八三四担，麦子四〇、三三七担，油脂二、五二二担，杂粮七二、七六四担；牲畜一七、四六一头，鸡鸭六五、九四三只；衣物二五七、六一八件；水产品二〇〇担；畜产品五八〇件；其它七、七〇四件。据统计，在日军侵占本县的七年中，全县财产直接损失，以民国三十四年九月物价为准，达一一九亿元，间接损失达五八亿元，合计一七七亿元。折合战前（民国廿六年上半年）物价为二、〇三〇万元（当时物价为战前之八七二倍）。

南昌會戰經過要圖

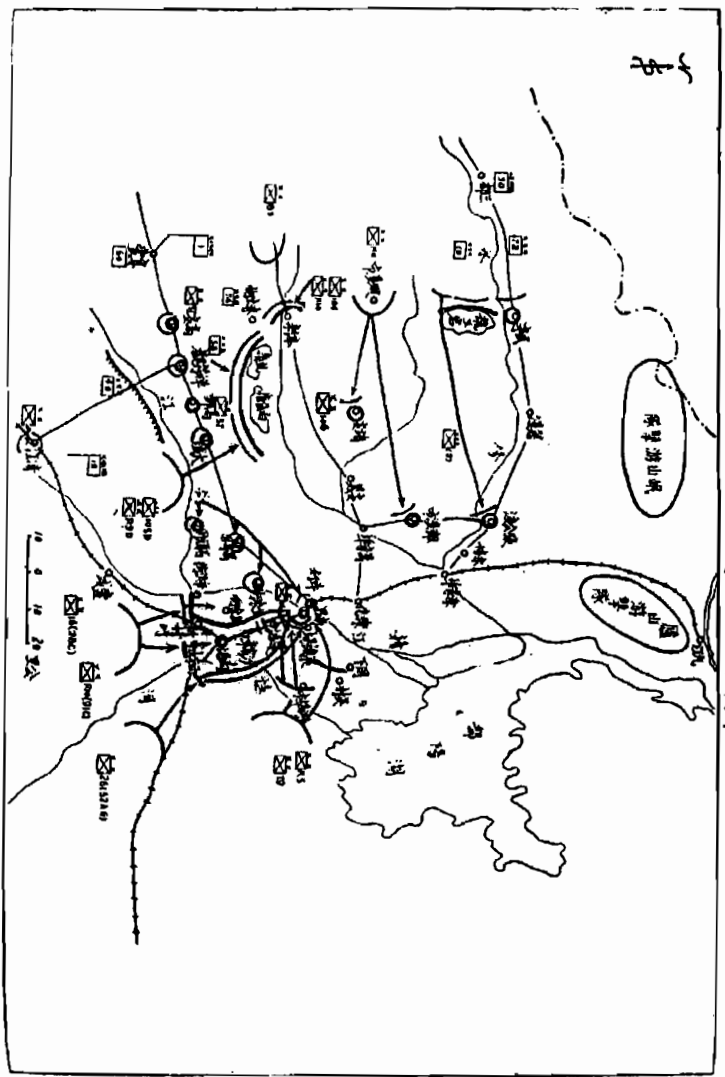
(中華民國二十八年十月三日)



(本圖系档案材料)

南昌反攻作战经过要图

(自八月五日至八月四日八十二图展)



(本图系档案材料)

高上會戰經過要圖

（本圖系密案材料）
旬上 月四 至 旬中 月三 年十三 國民

